

私の趣味—音楽

元ショット日本㈱

芦野 豊

私は高校生の時、1950年代末にリコーダーという縦笛に出会い、それ以来一貫してこの笛を吹き続けている。大学時代は既存の部やクラブには所属せず、学生オーケストラの友人たちをリクルートしては、室内合奏を中心とした演奏会を開催したりしていた。

リコーダーという楽器は、歴史的にバッハ、ヘンデル、ヴィヴァルディーなどの時代を最後に使われることがなくなった楽器である。ということは、バッハ、ヘンデルを含めそれ以前には非常によく使われていた楽器で、演奏する楽曲にも不足はない。私も、学生時代から、比較的長かった独身時代を通じて買い溜めした楽譜が相当量あり、そのほとんどは音を鳴らされることもなく眠っている。

私が偶然にリコーダーを知り、吹き始めた1960年以前には極めて珍しい楽器であった。それがいつの間にか小学生なら誰でも吹いたことのある楽器になってしまった。それだけリコーダー人口も増加し、優秀な演奏家も輩出している。しかし、大半の人々は、この安価な楽器でバッハ、ヘンデルの名曲が吹けることを知らずにいる。その意味で、私は小学生を聴衆とする演奏会などには積極的に出ることにしている。少しでも多くの人に、彼らの持っている楽器で、素晴らしい音楽を演奏できることを知ってもらいたいからである。

社会人になってからは、同じく仕事のかたわら演奏活動をする友人達と室内合奏のグループを結成し、ある有名な合唱団と一緒に活動するようになった。その間、仕事と音楽活動との折り合いをどうつけるか、ということが常に生活上に緊張をもたらした。私にとっての職業は会社での仕事である。それで給料を得て生計を立てているのであるから。音楽活動はそれに反して収入にはならないのに好きだからやる、いわば趣味である。仕事と趣味では仕事を優先させるのは当然と思われるだろうが、そう簡単に割り切れないものがある。音楽活動にも、重い責任が伴うからである。特に、我々のような小編成の合奏にあっては、一つのパートが欠ければ、練習自体が成立しなくなってしまう場合がある。そうなると、同じく仕事との折り合いをつけて参集した仲間を裏切ることもになってしまう。ましてや、切符を購入した聴衆が集まる演奏会ともなると、そう簡単に仕事を優先させて欠席するわけにはゆかない。

演奏といえば、今でも時たま見る夢がある。それは、自分が楽器を持ってステージ上の椅子に座っている場面で、照明が点灯しこれから演奏が始まるのに、自分が何を吹くのか解らないといったような悪夢である。

音楽という趣味はある意味で肩身の狭い趣味である。世の大勢から見れば絶対的といえるほどの少数派。また一口に音楽といっても色々な分野がある。オペラ、交響曲、ピアノ、歌曲等々。音楽を趣味とする人口が圧倒的に少数な上、私が特に好みまた演奏する、いわゆるバロ

ック音楽はその中でもさらに限られた分野である。仕事上の会食などの折に、趣味が、ゴルフ、野球、サッカーであればどれだけ楽であったろうかと思ったこと一切ならず、である。もちろん、これらの話題に参加できない、ということはないのだが。

1975年に私は転職してショット日本(株)で働くようになった。周知のようにショットはドイツに本拠を置く会社であるので、いきおいドイツ人とのコンタクトは多くなった。転職した当初は、これで自分の趣味がそれほどマイナーなものではなくなるのではないかと、との期待を持った。それで来日したショットの人達とは、時に音楽の話しをするようになったが、今一つかみ合うものを感じなかった。やがて自身がドイツに出張する機会を得た折に、レコード店(70年代にはCDは無かった)に入ってみると、いわゆるクラシック音楽は申し訳程度に置いてあるばかりで、他はジャズ、ポップスなどで占められていた。すなわち、私の想像と期待に反して、クラシック音楽はドイツでも主流ではなかったのである。

そんな訳で、私は仕事でつきあう人とは、音楽の話は持ち出さない原則を打ち立ててしまった。その結果、今度は数年のつきあいを通じて親しくなった相手が、実は私と同じような音楽愛好家であったり、場合によると楽器を演奏したりする人だったりしたのが偶然解ったりしたこともあった。思うに相手方も、音楽は特殊な趣味として、そのような話題を控えていたのであろう。

音楽を趣味とすることを積極的に言わないもう一つの理由がある。人伝に聞いてか、そのことを知った外来者が、CDを土産にくれたりすることがあった。それはおおむね、世間で名の通った指揮者、オーケストラによる名の通った名曲である。私もそのような名曲を聞かないわけではないが、指揮者、演奏者に対する選り好みがある。わざわざ買ってきてくれた人には申し訳ないことだが、謝意を述べて受け取って一

度も聞かずにおいたこともあった。

このように、音楽愛好者は世間的には少数派に属すること、また仕事とどう折り合いをつけるかで、苦渋の決断を迫られたことがあったとはいえ、私にとっては、いくつかの効用もある。一つは音楽を通じてのひととの交流であり、二にストレスからの開放であり、また三に仕事と音楽との切り替えは後述のように、仕事上のメリットももたらしたと思っている。

私は長年の音楽活動を通じ、ヨーロッパや北米の演奏者、指揮者、作曲家などと知り合うことができた。特にドイツの著名なオーケストラの団員達との交流は今もって続いている。最近では、それに韓国の演奏者も含まれるようになった。このような体験を通じて解ったことは、一緒に演奏した者同士では、コトバの力を借りることなく相互理解が進み、心から親しくなれるということである。あたかも、人と人とを分け隔てている障壁が、一挙に崩れ去ったかのよう

に。私はショット日本在職中の1980年頃から約10年間、韓国市場での営業を担当した。最初の頃は韓国出張の度に笛と楽譜を持参し、彼地でのアマチュアとの交流を期した。やがて知ることになったのだが、世界の中には日本や英国のようにアマチュアの演奏活動が活発に行われている国々がある一方、当時の韓国のように、アマチュアの音楽活動はほとんど皆無である国もあるのだ。その頃の韓国は、音楽はプロになるか、働き始めたら止めてしまうかの選択しかない世界であった。一度ドイツで博士号を取った韓国人の技術者と親しくなり、その夫人がヴァイオリン奏者であることを知った。私はその奏者と一緒に演奏することを希望したのだが、そのような場所が無い、またプロはアマチュアとはやらない、ということで実現しなかった。

その韓国で80年代に演奏ができた唯一の例は、何とソウルの一流ホテルの最上階にあるラウンジかバーのような所であった。ある時夕方早い時間に入ると、客が居ない中で若い女性が



最近の演奏会の風景

ピアノを演奏していた。そこで彼女と話してみると、音学大学のピアノ科出身で楽譜は読めるということが解った。私は、すぐに部屋に戻って、ヘンデルのソナタの楽譜とリコーダーを持ってきて合わせてもらうことにした。そのピアニストは、所見もきくなかなかの腕前の人だった。私も彼女も、しばし合奏を楽しんだのだが、やがてマネージャーが来て、変な音を出すのを止めてくれ、と言われて終ってしまった。私も客が入って来れば止めるつもりであったのだが。

韓国でアマチュアの演奏家との合奏の夢が実現したのは、ほんの最近のできごとである。私は2000年末にショット日本を退職後、数年前から韓国のガラス研磨・加工メーカーの顧問をしている関係上、今もって韓国への行き来がある。3年ほど前に知り合った韓国のヴァイオリン奏者の紹介で、アマチュアやプロの演奏家と知り合うことができたのである。それ以来、仕事帰りの週末にはソウルで一緒に合奏を楽しんだり（時にはプロの演奏者も参加）、私の東京のグループとの合同演奏会の企画も話し合われるようになった。

現役時代、日々の仕事に追われ、家庭では育児に追われていたストレスに満ちた時期を乗り切れたのも、音楽活動（自身の演奏だけでなく演奏会を聞きに行く場合も含め）あつてのことだと思っている。何か仕事上で引きずるようなことがあつても、一旦音楽に没頭するとリセットされたようになり、持ち越すことがなくなるのである。ショット日本退職後は、自宅で仕事をする事が多い。デスクの脇には譜面台があつて、仕事がひときりつけば練習し、電話がかかれば直ちに仕事に戻る。

これも、仕事と音楽の切り替えが即座にできる長年の習慣の賜物でもある。この切り替えは、ショットのように多分野、多品種にわたるガラスを扱う上でも役立つことであつた。韓国市場を担当していた頃は、一日の内に時間単位で光学ガラスの客、理化学ガラスの客、電子部品関係の客と話し合ったのが、今は懐かしく思い出される。

以上、とりとめの無い話して恐縮の極みであるが、音楽を趣味とする者として、ひとことを書かせていただいた。